総合教育会議記録

１．日時

令和５年１月３０日（火曜日）

午後３時２５分開会、午後４時４５分閉会

２．場所

条里南庁舎会議室

３．出席者

横手市長　髙橋　大（だい）

横手市教育委員会

教育長　伊藤　孝俊

教育委員　加賀谷　長吉

教育委員　二階堂　衛（まもる）

教育委員　今仲　和代

教育委員　佐々木　雅子

４．説明のため出席した者

総務企画部総務課長　嶋田　貴

教育総務部長　木村　雅美

教育総務部次長兼教育総務課長　菊地　浩昭

教育総務課主幹　大友　幸憲（たかのり）

文化財保護課長　佐藤　孝之

図書館課長　高橋　秀明

生涯学習課長　横井　朗（あきら）

スポーツ振興課長　近江　秀和

教育指導部長　西村　直崇（なおたか）

教育指導課長　桐原　悦子

学校教育課長　川津　久和

学校給食課長　岩瀬　司

５．事務局

総務課課長代理兼文書法規係長　小田嶋（おだしま）　あけみ

教育総務課教育総務係副主幹　小川　真貴子

教育総務課教育総務係主査　最上　拓弥

教育総務課教育総務係主査　細谷　裕子

６．会議に付した事件

（１）令和５年度教育行政方針（案）について

（２）その他

７．会議の経過と結果

開会　午後３時５８分

●嶋田総務課長

定刻より若干早いが、皆さんおそろいのようなので、ただ今から令和４年度第１回横手市総合教育会議を開催する。

この総合教育会議は、平成２７年の地方教育行政法の改正に伴い、設置が規定されたもので、市長と教育委員会により構成されるものである。例年、この会議において、次年度の教育行政方針について、ご意見を頂戴し、まとめている。

終了時間は、午後４時３０分を想定しているので、皆様のご協力をよろしくお願いする。それでは、開会にあたり、市長からご挨拶を頂戴する。

●髙橋市長

お疲れ様です。平素は教育長をはじめ、委員の皆様、そして事務局の皆様においても教育行政全般にわたり、横手市発展に、また子どもたちの成長に、市民の様々な心の豊かさの醸成にご尽力いただいておりますこと、この場をお借りし、深く感謝を申し上げる次第である。

私ども市長部局と教育委員会とが、しっかり想いを共有し、同じ方向を見て歩むべきとも思っているし、その連携がうまくいってこそ、こういった方針が生かされるものと深く、強く思っているところであ

る。こういった会議の場を通じて、より一層理解を深めながら、いい教育行政にしていただきたいというふうにも強く願っているところである。今、少子化ということで、なかなか子どもたちが無邪気にそこら辺のまちで戯れ、遊ぶというような光景を、一切見なくなったと言ってもいいくらいの状況だ。私が子どもの頃は、どこか子どもたちが集まりそうな場所に行くと、待ち合わせをしなくても誰かがいて、自然と近所の同世代が集まって遊びが発生する、というようなことだったし、様々な遊具でもなく、遊び場でもない場所が、勝手にルールを作って遊ぶ環境を、子どもたちなりに実現して勝手に楽しんでいた。ただ、昨今では危ないのか、迷惑なのか、そういった子どもたちが、自然発生的に遊びを作り、集って自由に町の中を闊歩しながらということは、大人たちが許さないという、そういう状況にもなっているので、家の中に閉じこもってサイバー空間の中で遊ぶということが主流になってきている昨今であり、果たしてそれがいいのかなと。私はどうかなとは思うが、社会の現実がそういうふうになっている彼らを、幸せなのか、かわいそうなのかは、傍から見ている私にしてみれば、残念な部分もあるし、便利を生まれた時から受けて、その便利な中で育てる幸せも、もしかしたらあるのかもしれないし、結果はどうなるのかは未来が現象としていろいろ語ってくれるのかなと思うが、なんとか横手市の子どもについては、それぞれ将来に渡っても幸せな人生

を送れるように、そしてどのような社会の中にあっても横手市の子どもたちはたくましく、どんな世界においても自分の幸せ、自分の生きる場をつかみ取れるそういう子たちに育っていただきたいものだなと強く思うし、それはみんなの願いなんだろうなというふうにも思っている。だからこそ、今の世はいろんな世の中の潮目、変わり目でどう教育を施していけば正しいのか。難しいかもしれないが、あまり教育の方針がコロコロ変わるというのもおかしいのだと思う。では、今までなんだったのということになってしまうので、たぶん一本筋の通った、芯の通ったそういう教育というものが、我々横手市ではなされているものと思っている。やはりそういった不変の、間違いないものというものを信じて、今後も子どもたちの成長のための応援というものを、我々大人はしていくことなのだなというふうにも思う。

今、大型公共施設が誕生前夜ということであり、利用の方法等もんでいるところだ。ゴールドラッシュとも言えるのか、オイルラッシュとも言えるのか、洋上では風が吹いていて、たくさんの無尽蔵のエネルギーがそこから産出されているということで、だいぶ県外から技術者、労働者が沿岸部には押し寄せている状況にある。もっともっとその状況は拍車がかかるのだろうと思うが、彼らも現場を離れれば、一人の人として余暇を楽しんだり、様々な生活の中での満足を味わう時間をどこかで得ようとするときに、風が吹いていない横手市にあって

も、横手に行けばこういうものが楽しめるとか、こういうものが見られるとか、そのような形でお金を使い、心の充実をしっかり勝ちとれる、そういう場を、市民にも提供し、そういう人たちの心も潤すような、そういうハコモノであればなお一層いいのかなというふうにも思っている。だからこそ時宜のあった事業とも捉えているし、その生かし方というのは、正にこの委員会が、その期待を寄せられる１つの大仕事とも捉えているので、なんとかいいハコモノを作って、たくさん創造してお客さんを呼び込み、市民を喜ばせるような、また、成長できるそういった空間で、実現したいなとも思っているので、どうか引き続きご指導よろしくお願い申し上げる。

冒頭申し上げたとおり、今後も皆様とともに、市全体を良くしていくための教育行政を、なんとか実現したいと思うので、何卒よろしくお願い申し上げ、長くなったが、挨拶に代えさせていただく。どうぞよろしくお願い申し上げる。

●嶋田総務課長

ありがとうございました。続きまして、教育長からご挨拶を頂戴する。教育長よろしくお願い申し上げる。

●伊藤教育長

どうもお疲れ様です。今日は市長に来ていただき、総合教育会議を開くことができ、大変喜んでいるところである。特別大きなことがな

い限り、年１回ということの会議になるので、この機会を有効に活用して、市長との懇談が深まることをご期待申し上げる。

誤解を恐れずお話しすると、教育委員会にとっては、学校教育、子どもたちにしっかり生きるための様々な力、それをしっかりつけてあげること、これが最大の目的だろうと思う。プラスして、いろんな課があるが、生涯学習の充実、これが両輪だろうと思っている。そのための各課の仕事が、そういったものを支えているのが教育委員会なんだろうと思う。生涯学習によって人々の生活が豊かになり、また、心豊かな生活を送れる市民が増えることで、実は子どもたちにもいい影響があり、子どもたちに力をつけることで、将来、横手の発展に結び付く様々な相乗効果がある。それらを教育委員会ががんばることで、少しでも保障できたらうれしいなと、日ごろから思っている。そのために学校教育においては、地味ではあるが、横手市として信じるやり方をどこまでも追求しながら、しっかりと子どもたちに力をつけていきたい。そういう思いでいっぱいである。令和５年度も、相も変わらず同じやり方を、さらに深めるやり方に変えて進んでまいりたいと考えている。ただ、社会の変化にも敏感に反応しながら取捨選択して、何が子どもたちにとっていいのか、そういったこともしっかりと見極めることが、我々の責任だろうというふうにも思っている。ＩＣＴの急激な進歩が、今、学校に押し寄せている。慌てふためくことなく、

ＩＣＴの何がよくて、どんな活用が子どもたちにとって能力を伸ばすのにいいのか、冷静に判断をしながら、しっかりと見極めながら進めてまいりたいなと思う。生涯学習の究極の施設が６年に、駅前に出来上がる。来年はその大きな建物を教育委員会として、市としてどんな活用をさせるか、どんな形で運営させていくのか、これを真剣に協議し、教育委員会としての方向性を示してまいりたいと思っている。そういった意味も込めて、令和５年度は大きく生涯学習の姿が変わる、変えるための大事な１年になるのではないかなというふうに考えている。そのあとは、今、市長からお話があった大型施設が、いよいよ動き出す。そこにもまた教育委員会の様々な仕事がきっと関わっていくんだろうと思う。様々なそういう機会を有効に活用して市民の皆様、そして、子どもたちに還元できるようにがんばるのが教育委員会というふうに考えて、新年度もがんばってまいりたいと思う。今日の会議を通して方針を精査していただき、来る５年度もまた皆さんでがんばってまいりましょう。今日はよろしくお願い申し上げる。

●嶋田総務課長

ありがとうございました。それでは、次第に沿って進めていく。議題の進行については、教育総務部長にお願いする。

（１）令和５年度教育行政方針（案）について

（２）その他

●木村教育総務部長

では、限られた時間であるので、さっそく議題に移りたいと思う。

（１）令和５年度教育行政方針（案）について　議題とする。説明させていただく。

●菊地教育総務部次長兼教育総務課長

それでは、私のほうからご説明をさせていただく。お手元に配布している横手市議会定例会令和５年度教育行政方針（案）をご覧ください。

【以下、［議題（１）資料］を基に説明】

●木村教育総務部長

ただ今説明いたしました令和５年度の方針について、教育委員会といたしまして、このように進めてまいりたいと考えている。せっかくの市長と協議できる場である。教育委員の皆様から様々なご意見をいただきたいと思う。よろしくお願い申し上げる。佐々木委員お願いする。

●佐々木教育委員

１ページ、「学校教育の充実」のところだが、揺るがない目標としては、「児童生徒たちの「生きる力」となって、その先の人生につながっていくことを願い」というところが、みんなで力を結集して、そこにもって行くということが、一番大事なんだろうと思う。「教育指導の充

実」のところで、ＩＣＴなどのことがいろいろ書かれているが、ここ数年、私の年齢にとりましては、マッハのスピードでＩＣＴ化がされていくような気がしてならない。子どもたちは当然ついていっているだろうと思うし、そういうことでなければ、全国で、また国際的にも太刀打ちできないのだろうと思っている。それはそれですばらしいことだろうと、そうでなければならないだろうと思っている。それに比してという訳ではないが、２番と３番の特別支援教育の充実と、不登校、いじめの問題が掲げられている。これは、マッハのスピードで教育が充実していくというのとは、また逆方向に行ってるような印象を受けた。みんなが等しく、同じように進めるように、ぜひ、いろいろな分野の違ったところからの力を集めて、みんなで向かって進んでいくものだろうなと思う。そして、またそういうふうにしていただきたいと切に思った。

　それから、３ページの中段に「特別な支援を要する児童生徒は年々増加傾向にあります」という文言がある。最初読んだときに、もっとわかりやすく表現できないかと思った。というのは、支援学校か養護学校かを選ばなくなっているのか、それとも、単に支援を要する子どもが全体的に増えているのか、どちらを指すのだろうと思いながら読んだ。後ろのほうを読んでいけば、つながるものではあるが、そこのところがちょっとひっかかった。以上である。

●木村教育総務部長

ただ今「特別な支援を要する児童生徒」という文言が、なかなかわかりにくいというお話があったが、表現を検討できるか。

【「はい」という声あり。】

●木村教育総務部長

「特別な支援を要する児童生徒」、この文言を、もう少しわかりやすいように、教育委員会側で協議してまいりたいと思う。どうぞよろしくお願い申し上げる。

他に何かあるだろうか。二階堂委員お願いする。

●二階堂教育委員

今の関連と言うか、「特別な支援を要する児童生徒は年々増加傾向にある」ということだが、学校訪問等に同行させていただき、やはり感じる。私どもが学校に通学している頃から比べて、比率的に、格段に上がっているような気がしてならない。これはどういうことかなと。程度の問題もあろうかと思うが、遺伝的なものなのか、医学的なものなのか、私は存じ上げないが、それは非常に懸念しているところでもあるので、文言等はこれから調整していただくとしてもその点については、引き続き教育の方針としては継続してやっていただき、重要視しなければいけない問題だと思っている。また、別の観点でＩＣＴだとか、そういう方面で、当然ながら全国的な方向性があるので、我が

横手市では、それとは違った方向性というのは、まず考えられない訳で、それはそれで一生懸命頑張っていくしかないだろうなと思っているが、世情と言うか、社会情勢を考えれば、やはり子どもたちの声がなかなか地域に届いてこないような状況に現在あるのかなと思っている。市長の挨拶にもあったが、なかなか子どもたちの声が聞こえてこないと、そういうのは本当に、最近とみに感じているところである。遊びの形態が、かなり私たちの頃とは変わっているので、それも致し方ない面もあるけれども。この地域、社会、現在の大人社会との連携と言うか、つながり、こういうものをもっともっと深めていかなければ、やはりこの地域に根差した人材育成というものは進んでいかないんじゃないのかなと思ってもいる。子どもたちがそうであるというのは、世の中にいる中でよく聞く言葉が、やはり、ぜんぜん子どもたちの声が聞こえないとか、今、学校で何をやっているのかわからないとか、そういう言葉も結構耳にしている。とは言え、肝心の大人世代、高齢者世代もまた同じように自分の殻に閉じこもっているようなそういうことも感じている。昔はお茶に遊びに出歩くと言うか、高齢者であれば友達を求めてお茶飲みをして楽しんだりする風景が結構あったと思うが、それもなかなかなくなってきている。肝心の高齢者、大人自体がその交流を狭めていっている状態なので、子どもたちだけの関係性と言うか、子どもたちに限定したことでなく、社会全体がそうな

っているのかなというものもあるので、生涯学習のほうにもこれからもっと力を傾注していかなければいけないのかなと思っている。さきほどの定例教育委員会の中でも、生涯学習課からもいろいろなご報告があったが、そういう参加比率的なことを考えると、なかなか増加傾向にあるのかどうか、ちょっとわからないと思っているし、そういう面から、各地域での諸事業も、より充実したより楽しめるものをもっともっと考えていかなければいけないんじゃないのかなと、このようにも思っている。よろしくお願いしたいと思っている。以上である。

●伊藤教育長

特別支援教育の学級に入る児童生徒が、ここ５、６年の間に相当な増加傾向にある。これは、横手市に限らず全国的な傾向で、文科省も実は今、それを問題にしている。支援学級に配置できる教員が、実際のところいない。つまり、特別支援教育の資格を持つ教員は、圧倒的に少なくて、日本全国、ほとんど無免許で支援学級の学担をやっている状況が現実である。研修を受けながら、支障のないようにはしているが、それが現実で、横手市も増えてきている。学者の中には、医学の進歩で、一説には明確な、医学的な病名がつけられるレベルになってきた。昔はちょっと変わったやつだで終わったのが、何々症候群だとか、いろんな病名がつけられる時代になって、やっぱり増えてしまっているということをおっしゃる方もおられるし、子どもの特性をし

っかりつかもうと、その上で、子どもの特性に合った教育をしなければいけないというような考え方が主流になってきているので、それに伴って、子どもの個性をしっかり見極める段階で特別支援が相応しいだろうという判断が、前からするとしっかりするようになったというようなこと。様々な理由があるけれども、いずれこれからの大きな課題としては、個性的な子に対して、どれだけ学校が寄り添った形で指導できるかというのは、どの市町村も頭を悩ませているところで、そこには少し頑張らなければいけない課題があるということは、共通認識として先生方も認識しているところである。それから、ここ５、６年、７、８年、特に横手市の場合は、統合が進んだ影響もあり、地域との交流が少ないんじゃないかというお声をいただくことがある。二階堂委員からのお話は、おっしゃるとおりである。これは反省だけをしていては前に進まないということであるが、やはり何かの体制を作らないと、地域と連携を組むということについて、解決策はなかなか見つからない。個々の努力に任せていては、それから、それぞれの学校に任せていてはなかなか解決ができない、そういう世の中になってきている。それを打ち破る１つの手立てとして、コミュニティスクールの採用があった。これを１つの起爆剤として、地域に学校が出かけていく、もしくは、地域が学校に出かけてくるという相互関係を醸成していくのが、具体的な方策としていいのではないかと考えて、コミ

ュニティスクールの導入に舵を切った訳だ。その現状について、なかなか市長に詳しくお話する機会がないので、横井課長、ちょっとだけこれからやる研修会も含めて、今年の動きを大雑把でいいので、情報提供してもらえないか。

●横井生涯学習課長

今、教育長からお話があったコミュニティスクールの取り組みについて、簡単に説明したいと思う。コミュニティスクールについては、昨年度試験的に４校で行い、今年度から市内全小中学校２０校で実施している。学校と地域が連携・協働して取り組む体制を作るもので、未来を担う子どもたちの成長を、地域全体で支えるために、学校が地域と連携・協働して行っているものである。そのために、各学校単位に地域コーディネーターを配置し、この方を介して様々なやりとりを行っている状況だ。そこに、学校統合が進んで各地域から学校が無くなり、子どもたちの声が聞こえてこないという声は、たくさんいただいている。そういった中で、学校でできること、地域でできること、様々ある訳だが、お互いに連携・協働しながら進めていくということで、現在、地域では地区交流センターを中心として、それから学校は各学校を中心とし、お互いに手を取り合って活動を進めているというような内容となっている。今年度、年度初めに、１回目の学校運営協議会を開催し、各学校で話し合いをし、目指す子どもの姿ということ

で、地域と学校が共有している。学校の運営方針について協議し、承認を得て、それを実現するために、委員の皆さんとともに、地域とともに学校が中心になって取り組んでいる。２回目の運営協議会の際には、ほとんどの学校で、学校の授業風景をご覧いただいた。特に進んでいるＩＣＴを使った授業などを視察し、その後いろいろと意見交換をしている。そして、この後、２月中に３回目の運営協議会を行う訳だが、そこで学校評価について行う流れとなっている。その評価を受けたものを翌年度に反映させ、新たな令和５年度の学校運営方針を出してそれを承認いただき、また取り組んでいくという流れになっている。このコミュニティスクールについては、地区交流センター運営協議会とか、地域で主体的に活動している組織、団体、企業、個人が学校と連携しながら地域とともにある学校づくりと、持続可能な地域づくりを目指していくものとなっており、学校と地域がお互いに双方よしのウィン、ウィンの関係を築くことができるということが重要というような取り組みを行うものである。令和４年度の市報７月号をご覧いただいたと思うが、こちらにコミュニティスクールとはなんぞや、それからいろんな委員の声などを載せている。改めてご覧いただければと思う。分かりづらかったかもしれないが、よろしくお願い申し上げる。

●伊藤教育長

学校の課題を、運営協議会の委員の方々とともに解決していくという学校がいくつかみられたのは、今年の大きい成果であり、増田小学校では、増田の梵天を、学校ではもうできないという相談を運営協議会にしたところ、選抜メンバーでできないか。こういう協力ができますよというような建設的な意見をいただき、その結果、中学校も巻き込んで新しい参加の仕方を、今、模索しているというような、そういう具合になってきている。これはコミュニティスクールをやったおかげで、地域の意見を直接学校が吸い上げて新しい試みに発展したいい例だろうと思うので、そういった意味でコミュニティスクールという形を作ることで、これまでただ単に口説いていたことが、具体的に解決に向かうということのいい形ではないかなと思う。口説いてばかりでは前に進まないので、コミュニティスクールという体制を使いながら、また、別の学校ではまた新しい取り組みがきっと出てくるだろうということで、これには力を入れていきたいということである。

それから、もう１つ。来年度、さきほどもご紹介があったが、実は国の学習力調査等はすべてオンラインでやることを国は考えていて、その問題をパソコンで受け取る試行が５年から始まる。その仕組みがいろいろあり、今日もWi-Fi（ワイファイ）のことが政策会議に出たが、簡単にその仕組みをご紹介させていただく。

●教育総務課　最上主査

さきほど少し話があったが、今年の４月に全国学力学習状況調査が行われており、４月に中学校３年生の英語がスタートする。その中の話すことの調査、スピーキングテストが実際に子どもたちに１人１台端末として付与しているタブレット端末、横手市ではｉＰａｄ（アイパッド）だが、それを通じて、中学校３年生の英語の話すこと調査が行われることが全国的に決まった。

【以下、資料に基づき説明】

●木村教育総務部長

これからの学校教育のＩＴの推進について、一部ご紹介させていただいた。予算的にも、タブレット導入に５億円ほどいただいて導入させていただいたところである。

●伊藤教育長

３ページの「オンライン上で学習できるシステムにより」というように、今、最上主査が、ＭＥＸＣＢＴ（メクビット）とか、Ｌ-ｇａｔｅ（エルゲート）とか用語を使っているが、一切使わないで説明した部分が今の部分である。これが採用されることによって、国レベルの問題が、即座に何々小学校で何とか君のｉＰａｄ（アイパッド）の上でも操作できる状況が、これからは生まれてくる。そういった世の中の動きには間違いなく遅れないようにしつつ、一方では、将来に向けて生涯学習を推進できるような文化レベルの高い大人にしていくためには、言葉の教育がしっかり必要である。そこ

は、横手市はぶれないでがんばっていかなければいけないんだろうということを、方針に書き込みたかったということである。私からは以上だ。

●木村教育総務部長

時間もだいぶ押しているが、どうだろうか。加賀谷委員。

●加賀谷教育委員

私からは、部活動の地域連携移行、この点について、私自身バレーボールの本当に狭い範囲の勝手な意見になるかもしれないが、選手たち、生徒たちの言動をずっと引き続き見てきて、緩慢なプレーヤー、試合態度のどうしても悪いようなそういう生徒、子どもに対してゲンコツはもちろんアウトだし、強い言葉での叱責もアウトというような状況を見て、子どもたちは指導者なり、先生たちをあまりリスペクトしていないように見える。対等の口きき、そして思ったことをそのまま言ってしまう、やってしまうというようなことが見受けられ、最近その頻度が大きいのかなと、ここ数年感じている。やっぱりそれが我慢するとかという、古臭い言葉で恐縮だが、本当に死語になったような言葉だが、自分を抑えるといったことがあまり見受けられない。だから、ＳＮＳでいろいろとんでもないことをしたというようなことにつながっていくのかなと、最近特にそういう感じがしている。

●木村教育総務部長

ありがとうございました。今後、部活動の在り方についても様々検討されていくものと思うので、そういう情報も。

●加賀谷教育委員

それで、よろしいか。地域連携・地域移行、このポツの間には、よほど入念な時間なり検討の余地というものは相当数あるんじゃないのかな。あっさり連携・移行というふうになっているが、そういう感じがしている。

●木村教育総務部長

ありがとうございました。今仲委員よろしいか。

●今仲教育委員

私も加賀谷委員がおっしゃった「学校部活動の地域連携・地域移行に向けた取組」の件で、実際、自分も息子、娘がいるが、先生方にもいろいろ部活動でもご難儀をかけており、いつも感謝しているが、将来どのように子どもたちの活動が拡がっていくのか、そして、地域とどのようなよい関係を持っていくのかとても期待している。

●西村教育指導部長

加賀谷委員、今仲委員からは、部活動の地域連携・地域移行についてのお考え、想いをお聞きした。教育委員の皆様ご指摘のとおり、急激な変化には、子どもたちの想いであったり、保護者の想いであったり、それから、受け皿の問題であったり、指導者の質の確保であった

り、数も確保できないといけない。収入も確保できないと、スポーツ少年団なり部活動、特に部活動というのは、自分で選択して実践型活動を行っていくという現在の学校部活動というのがある。国の大きな方向性としては、地域の子どもたち、運動もそうだし、文化芸術分野もそうだが、地域で育てようという方向にはあるが、横手の子どもたち、保護者の想いに添った形、それを来年度、協議会、検討会を立ち上げて協議していくということにしたいと思う。そういった動きを、教育委員会として考えている。

●木村教育総務部長

時間が押してきたので、市長に最後お話をいただければと思う。

●髙橋市長

いろいろ、ごもっともなご意見を頂戴し、非常に参考になるところである。ＩＣＴ、文明の利器というか、これからの人間活動のインフラにもなるものだから、我々、車の運転をできる、それと同じような形で使いこなせないと、最低限いけないかなという現実があるので、いい部分をどんどん吸収して、活用すべきなんだろうというふうには思っている。ただ、やはり便利で生まれた時間とか、余ったエネルギーを、他の付加価値に変えるための時間とか、エネルギーにしていかないと、たぶんどんどん人間が劣化していくことになるのは、この類の特徴だと思っているし、ＩＣＴのビジネスの世界の導入そのものが

全体のＧＤＰの成長とか、国同士つながらない。結局、ＩＴで短縮された時間とか、要らなくなった労力とかは、その分仕事にあぶれる人も出てくるという、要は元あった仕事、人海戦術でやっていた仕事が機械に置き代わるということで、そのあぶれた人そのものが別の仕事に就いたり、余った時間で別の付加価値のための創造の時間にしないと、本当は要はゼロサムな訳だ。なので、楽になってよかったとか、煩わしいことが解消されてラッキーと思って、それで一丁上がりとなってしまうと本当はダメで。便利になった分、その余す時間とエネルギーを、別の価値の創造につなげないと、ただＩＴ関係の会社にお金と時間を吸収されておしまいということになるので、そのトリックだけはしっかり横手市民にはわかって、その諸刃の刃の刃もついているという部分はしっかり理解して。我々は武器としてのみ使えるようにしていかなければいけないのかなというふうに思う。高校２年生になってＤＳ断ちをした子が、ユーチューブを見る時間が５倍になったと言っていた。なので、そこで得た楽しみとか、良さというものの呪縛からは逃すことになるように。彼らは天才たちが集まって、ＩＣＴ漬けにさせるようにうまく作られているので、そういうふうな彼らの思惑を知った上で、うまく利用すればいいのだろうが、どんどんはまっていくという感じで、彼らの資金回収マシンに、単なるいいお客さんになってしまうと、それこそ愚かな人というふうになるので。愚かな

使い方じゃなく、自分にとってプラス以外の何物でもない、組織にとってもプラス以外の何物でもない使い方をしていくべきなんだろうなというふうに思う。それは確認すべきだろうと思う。ただ、障がい者も、高齢者も、子どもも今となっては使いこなせさえすれば共通言語になって、運動神経とか関係ない。歩けないとか。なので、世代間を超えた交流の手段としては、これはいい使い方ができるのかなというふうには思うし、それをいろいろと日本中、世界中がトライしていくのだろうが、我々も、よろしい使い方というものを見出す努力というのはしていくべきなのかなと。まだこれは時代としては出発したばかりで、これからなんだろうなと思って期待もしている。

これからマスクが取れる。小学校以下の話だが、物心ついた２、３歳の子は、たぶん担当の先生の素顔を見たことがない。３年間（マスクをして）過ごしているので。我々は、なんとなくその人の表情を見れば、辛そうだとか、具合が悪いとか、うれしいとか教えられずに、勝手に会得している。誰かからこういう表情は悲しいのだよとか、こういう表情は我慢しているんだよと、教えられていない。たぶん普通の生活の中で、その表情と、その置かれている人との情報を突合させて、おそらくこうなんだろうなというふうに思うのだろうけれども。今の小さい子は、表情を見てない。目を見て人の心を盗むという眼力は身についているのかもしれないが、人の表情を見て心を探るという

か、つかむ、それがないので、人の表情を見ることが出来ない３年間を、どう成長に影響するのかというのは気になるし、中学校時代、このコロナで、今３年生の人は小学校で友達になったが、高校でまた別々になるという子は、おそらく社会人になったとき同級生ってわからない。巷で会っても。これ（マスク）してるので。教育委員会と関係のないことかもしれないが、おそらく社会に出てから、先生に会っても恩師だと、今の中学校３年生で卒業する子はわからない。同級生も昔のように１０クラスあるという時代は、端っこのクラスの人がわからないとかあるのかもしれないが、今、数クラスしかない中学生時代で、いろんな学校から集まってきた子で、たぶん高校卒業して社会人になる頃には、同級生に会っても、同級生だと気づかないまま終わるのだろうなと思う。だからどうしたということなのだろうが、そういう時代の子だということだ。だからどうすればいいのということも私にはよくわからないが、それは社会の現象としては気がかりに思ったりもする。

　それから、支援が必要な子で叫んだり、走ったりとか暴力的な、集団の輪を乱すような過激な行動みたいなことをしてしまう子は、それは目立つので、やっぱり指導対象としてクローズアップされやすいだろうし、正にその子をなんとかしないことには授業が進まないだろうから、しっかりやるのだろうけども、おとなしくて誰にも悪影響を及

ぼさないけれども、そういう状況を抱えている子は、目立ってバーンとやる子よりは観測しづらいというか。そういう特性を抱えているのにもかかわらず、気づかれずにいる子のほうは大変だ。そこら辺はもらさないで、一人ひとりしっかり先生方がチェックして、見逃さないようにしてらっしゃると思うが、先生も忙しい昨今なので、なんとかもれなくがんばっていただきたいと思うところである。

いよいよ残念ながら日本も世界のトップじゃない状況が続いていって、鳥取県でベトナムくらいとも言われている。アジアで、中国１５億、インド１４億、アジア全体で４０億人いるが、たぶんおそらく日本人の大半は、アジアと日本と言うと、たぶん内心アジアのほうが下だよなって思っている部分はあるだろうと思うが、たぶんこの３０年の間に、内心俺たちより下だよなと思っている４０億人に抜かれてしまい、成長率からいくと、今、追い馬はゴールで離され、かつ、それどころかさらに未来はもっと離されるかもしれないとなると、ハングリーで、人口もいっぱいいて、日本人より我慢も出来て、賢い４０億の１０分の１の４億人とか、２０分の１の２億人とかは、どう頑張っても勝てないような優秀なアジア人が出てくるだろうから、日本人って程度が低いねってバレてしまう。そういう時代がもう目と鼻の先にあるなと思って。少なくともアジア人の方々は日本って憧れの国だっただろうし、未だにそう思っている国も、国民もいらっしゃるのだと

思うが、せめて偉ぶる必要はないだろうが、落ちぶれても、さすがに日本は憧れる、尊敬するに値する民族だと思われる日本人であり、横手市民でないと、ただただ撃ち抜かれて、結構思ったよりたいしたことなかったんだねと思われる日本だと残念だなと思う。次の世代の子どもたちにも憧れる、尊敬される、慕われる、頼もしく思われるようになってもらいたいものだなというふうには思っている。せめて少数精鋭というか、明らかに少ない子どもたちなので、社会が手塩にかけることは昔よりできるはずなので、手塩にかけたなりに、さすが人口は少ないながらもすばらしい日本人だなというところを、一人ひとり育てたいなという、育ってもらいたいなというふうにも強く思う。将来、日本が置かれている状況が厳しいからこそだ。少なくなってしまった子どもたちには、背負うものも大きすぎてかわいそうだが、せめて横手の子たちはと思ったりする。

やれる限りは、今後も尽くしながら皆様方の奮闘を大いに期待をして私からは感想に代えさせていただきたいと思う。どうもありがとうございました。

●木村教育総務部長

ありがとうございました。今いただいた皆様からのご意見は今後の事業に反映するように、また文言の修正等をして成案とさせていただく。（２）その他は、こちらのほうでは準備していないので、議題に関

しては終了いたしたい。この後の進行は総務課にバトンタッチする。

●嶋田総務課長

　ありがとうございました。以上で予定していた案件の協議は終了した。以上で、令和４年度第１回横手市総合教育会議を終了する。大変お疲れ様でした。

閉会　午後４時４５分